

# 鳥よ

---



この末期においてなお思 在這盡頭終於回想起

い出す

私だけが知っていた鳥の  
姿を

遙か遠き空のその何処よ  
りか

風を従えて舞い降りた  
思えばはじめからお前は  
きっと

私を騙そうとしていたの  
だろう

お前のあの目が悪戯めき  
笑う

若き日の私を誘うように

乞われるがままにその手  
を取った

——その始まりを悔やめ  
ようか——嗚呼

只有我知道的鳥兒的身影

從遙遠天空的不知何處而  
來

隨風翩翩落下的樣子  
仔細回想的話妳肯定從一  
開始

就想要騙我了吧

妳的那雙眼神中暗藏着調  
皮的嬉笑

像是要引誘那時年少無知  
的我

宛若同情我似的牽起我的  
雙手

——那樣的開端真令人懊悔  
——啊

鳥よ 鳥よ そは空の何  
処

この手引く先私を連れて  
行く

鳥よ 鳥よ 翼持つもの  
よ

その姿 けっして忘れえ  
ぬもの

鳥兒啊 鳥兒啊 汝在天  
空的何處

請牽起我的手帶我一同前  
去

鳥兒啊 鳥兒啊 身懷雙  
翅的妳啊

那身影 絕對不會忘懷

わたしが見上げる限りに  
お前は空を翔けてゆくの  
だろう

只要我還在仰望天空的話  
妳就還會在那天空飛翔吧

流れる時さえも行く未知  
らず  
ならばこの身をして何を  
知りようか？  
お前と過ごした日々のそ  
の中に  
けっして戻らぬ針、刻む  
ことも――  
それはきっといつか来る  
定めの日  
わたしだけがそれを受け  
入れられずに  
お前のあの目が愁いに沈  
む  
若き日の私を拒むように  
乞うこともできずにその  
手を離した  
――唐突すぎる終わりの  
ときに――嗚呼

就連流淌的時間也不知何  
去何從  
那麼徒有這身軀又能知曉  
什麼？  
和妳一同度過的每日中也  
有  
被那絕不會倒退的時針戳  
到的時候  
那一定是命中註定必將到  
來的某日  
只有我遲遲不能接受那結  
局  
妳的那雙眼中愁苦而消沉  
  
像是要拒絕年少無知的我  
就連乞求也做不到 只能  
撒手  
――這樣的結局實在太過唐  
突――啊

鳥よ 鳥よ どうか今一

鳥兒啊 鳥兒啊 還請再

度

雲のあい　お前を探せ  
ども

鳥よ　鳥よ　翼持つもの  
よ

その姿　けして二度とは  
見えず

お前の居ない空は遠く  
どこか余所余所しいほど  
に虚く――

給一次機會

即便要深入雲霄　探尋妳  
的身影

鳥兒啊　鳥兒啊　身懷雙  
翅的妳啊

那身影　決無法再有幸目  
睹

沒有妳的天空是如此遙遠  
處處都如此陌生而空虛――

「何故お前は」と問えど  
も答えなど無く

徒に時　重ねるまま  
お前のほかに誰が翼持つ  
だろう？

たとい私にしか見えぬと  
て

就算追問「爲什麼妳會」  
也了無回應

唯有時光　徒然流逝  
除妳以外還有誰擁有翅膀  
呢？

就算只有我能看見亦可

この期におよんでこの目  
に映る

――空より舞い降りた幻  
想――嗚呼、それは！

卻逢此時映入眼簾的

――從天而降的幻想――  
啊，那是！

鳥よ　鳥よ　何故今に

鳥兒啊　鳥兒啊　爲何事

なって――

お前の目は 何も語らぬ  
まま

鳥よ 鳥よ 翼持つもの  
よ――

その姿 よくぞ再びここ  
に――！

鳥よ！鳥よ！さあ今一度

この手引いて私を連れて  
行け

鳥よ！鳥よ！翼持つもの  
よ！

お前を けして離しはし  
ない！

その空へと私も行こう  
いま循環（空駆け巡）る  
風となって――

お前が空飛ぶときには  
わたしも傍に居られるよ  
うにと――

到如今――

妳的眼中 不露絲毫神色

鳥兒啊 鳥兒啊 身懷雙  
翅的妳啊――

那個身影 終於又再臨於  
此――！

鳥兒啊！鳥兒啊！還請再  
一次

牽起雙手攜我遠走高飛

鳥兒啊！鳥兒啊！身懷雙  
翅的妳啊！

這一次我絕不會放開妳的  
手！

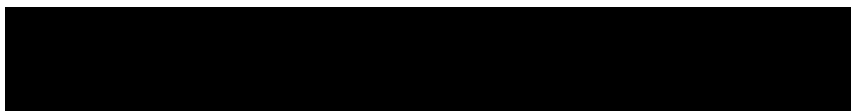
我也伴妳一同飛向那晴空  
此刻化作騰空而上的疾風  
――

每當妳乘風翱翔之時  
願我也永遠伴隨在妳身旁  
――

---

文花帖 撮影曲1 風の循環 ～ Wind Tour (原  
曲)...

---





「凋叶棕」的「鳥<sup>とり</sup>よ」，原曲來自兩首「射命丸<sup>しゃめいまる</sup>文」在「東方文花帖」附錄CD中的主題曲，分別是攝影曲1「風の循環 ～ Wind Tour」和攝影曲5「風神少女」。

選這首歌，其實是因為我上週終於拿到駕照了（都老大不小了方纔？），而這週卻沒有車能開，一直在回味那種飛馳的感覺。

關於<sup>あや</sup>文的身世的講解，以後估計還會有別的歌詳述，這裏先賣個關子。

歌詞其實還算簡易，就只改換個別字詞表記標上註音吧。

---

この<sup>まつご</sup>末期に<sup>お</sup>於いて<sup>なお おも</sup>尚<sup>だ</sup>思い出す  
<sup>わたし</sup>私<sup>し</sup>だけが<sup>とり</sup>知っていた<sup>すがた</sup>鳥の姿を  
<sup>はる</sup>遥か<sup>とお</sup>遠き<sup>そら</sup>空の<sup>いずこ</sup>その何処よりか

かぜ　したが　ま　お  
風を　従えて　舞い降りた

おも　はじ　まえ  
思えば　始めからお前はきっと

わたし　だま  
私を　騙そうとしていたのだろう

まえ　め　いたずら　わら  
お前のあの目が　悪戯めき　笑う

わか　ひ　わたし　さそ  
若き日の私を　誘うように

こ　ま　ま　ま　て　と  
乞われるが　儘にその手を取った

はじ　く　ああ  
——その　始まりを　悔やめようか——　嗚呼

---

とり　とり　そら　いずこ  
鳥よ　鳥よ　そは空の何処

て　ひ　さき　わたし　つ　い  
この手引く先　私を連れて行く

とり　とり　つばさ　も  
鳥よ　鳥よ　翼持つものよ

すがた　けっ　わす　え  
その姿　決して忘れ得ぬもの

わたし　み　あ　かぎ  
私が見上げる限りに

まえ　そら　か　ゆ  
お前は空を翔けて往くのだろう

---

なが　とき　ゆ　すえ　し  
流れる時さえも行く未知らず

み　なに　し  
ならばこの身をして何を知りようか？

まえ　す　ひび　なか  
お前と過ごした日々その中に

けっ　もど　はり　きざ  
決して戻らぬ針　刻むことも——

きた　さだ　ひ  
それはきっといつか来る定めの日

わたし　う　い  
私だけがそれを受け入れられずに

まえ め うれ しず  
お 前 の あ の 目 が 愁 い に 沈 む  
わか ひ わたし こば  
若 き 日 の 私 を 拒 む よう に  
こ て はな  
乞 う こ と も で き ず に そ の 手 を 離 し た  
— とうとつ お とき ああ  
— 唐 突 す ぎ る 終 わ り の 時 に — 嗚 呼

---

とり とり いま いち ど  
鳥 よ 鳥 よ ど う か 今 一 度  
くも あわい まえ さが  
雲 の 間 お 前 を 探 せ ど も  
とり とり つばさ も  
鳥 よ 鳥 よ 翼 持 つ も の よ  
すがた けっ に ど み  
そ の 姿 決 し て 二 度 と は 見 え ず  
まえ い そら とお  
お 前 の 居 な い 空 は 遠 く  
よそ よそ うろ  
ど こ か 余 所 々 々 し い ほ ど に 虚 く —

---

なぜ まえ と こた な  
「 何 故 お 前 は 」 と 問 え ど も 答 え な ど 無 く  
いたずら とき かさ  
徒 に 時 重 ね る ま ま  
まえ ほか だれ つばさ も  
お 前 の 外 に 誰 が 翼 持 つ だ ろ う ？  
たと わたし み  
例 い 私 に し か 見 え ぬ と て

---

とき およ め うつ  
こ の 期 に 及 ん で こ の 目 に 映 る  
— そら ま お まぼろし ああ  
— 空 よ り 舞 い 降 り た 幻 想 — 嗚 呼 、 そ れ は ！

---



とり とり なぜ いま  
鳥よ 鳥よ 何故 今 になって――

まえ め なに かた  
お 前 の 目 は 何 も 語 らぬ まま

とり とり つばさ も  
鳥よ 鳥よ 翼 持 つ もの よ――

すがた ふたた  
その 姿 よくぞ 再 び ここに――！

とり とり いま いち ど  
鳥よ！ 鳥よ！ さあ 今 一 度

て ひ わたし つ ゆ  
この 手 引 いて 私 を 連 れ て 行 け

とり とり つばさ も  
鳥よ！ 鳥よ！ 翼 持 つ もの よ！

まえ けっ はな  
お 前 を 決 して 離 し は し ない！

そら わたし い  
その 空 へ と 私 も 行 こう

そら か めぐ かぜ  
いま 空 駆 け 巡 る 風 と な っ て――

まえ そら と  
お 前 が 空 飛 ぶ と き に は

わたし はた お  
私 も 傍 に 居 ら れ る よ う に と――